「人工知能（対話型ＡＩ）」

日本テンプルヴァン㈱　井上拓郎

「ＣｈａｔＧＰＴ」

新年度の４月に入り街にはマスクを外して歩く人の姿も増えてきました。外国人観光客も大勢見かけるようになり、少しずつコロナ禍前のような日常が戻ってきた気がします。５月８日からは新型コロナウイルス感染症の分類が季節性インフルエンザなどと同等の５類への移行が決定しており、今後の生活も大きく変わろうとしています。話は変わりますが、皆さんは私たちの今後の生活を大きく変えるであろう「ＣｈａｔＧＰＴ」についてご存知でしょうか。チャットＧＰＴとは、人工知能（対話型ＡＩ）が質問に対して人間のような回答をしてくれるサービスです。簡単な作文や小説を書いたり、表計算の関数を作成したり、簡単なプログラミングができます。先日、このチャットＧＰＴの開発会社のＯｐｅｎＡＩ社のサム・アルトマンＣＥＯが岸田文雄総理と会見しましたが、ＡＩ技術の活用についての長所と欠点に対する軽減策について話したそうです。また今後日本に事業拠点を設け、日本の研究者とも連携し、日本語や日本文化に合わせた開発を進めると公表しました。ただ実用にはプライバシーの保護（質問に入力した個人情報の漏えいの恐れ）、倫理観（モラルや良心）、情報の正確性（情報の真偽）などの観点から越えなければならないいくつかのハードルがあります。これらの課題をクリアすれば、より安全に、正確に、効果的に、人工知能（対話型ＡＩ）が身近なものとなるでしょう。ちなみにチャットＧＰＴを利用するには、ＯｐｅｎＡＩ社のサイトからサインインして（メールアドレスと電話番号を登録して）無料で利用できますが、マイクロソフトのウェブブラウザＥｄｇｅの検索エンジンＢｉｎｇにも搭載されています。まだまだ質問によっては回答の正確性に欠ける場合もありますが、試しに「仏教の教えについて」と質問してみたところ、四諦と八正道についての説明文が出てきました。著作権の関係で作成された文章をそのまま載せられませんが、皆さんも質問してみては如何でしょうか。ちなみに東京大学ではこれらの対話型ＡＩ（生成系ＡＩともいう）を利用し、そのまま論文に転用する事を禁止としています。

「ＡＩに出来ない事」

コロナ禍で変わってしまった私たちの日常も、昔のように戻ってくる部分もあれば、新しい生活様式が日常となる部分もあると思います。労働に関しては、普及したテレワーク（在宅勤務）やオンライン会議など、場所の制約を受けない労働環境を維持している会社がコロナ禍後も多くあります。特に大企業においては、様々な業務をＤＸ化（システム化）してデジタル技術の活用を進めており、人の手を介した作業のオートメーション化が進んでいます。文書管理、在庫管理、勤退管理、顧客管理、財務管理などはＡＩなどを用いたシステム化が進んでおり、普及が進めば中小企業でも導入する会社が増えると思われます。実際にＡＩが普及すると職を追われる仕事があると言われています。それは一般事務、銀行員、警備員、スーパーやコンビニ定員、運転手などです。処理スピードと正確性、一貫性などが求められる仕事はＡＩに置き換わると言われています。反対に医療や介護、営業、コンサルタント、教師などは、人間ならではの柔軟性や対応力が求められる為、ＡＩには置き換われないとされております。僧侶は後者のほうだと思いますが、寺院事務（檀家管理、財務管理、文書管理）は、近い将来ＡＩ化（ＤＸ化）が進むでしょう。